



陸上部プロレス技キャットファイト

ヒロワークス

女子大のグラウンドでは、四年生の有希が自らに長時間の練習を課していた。先日の陸上大会の5000メートル走で終盤に失速したのを改善するためだ。

土曜日の午後は、自主練習の時間なので、遊びたい盛りの後輩たちは、午前中で練習を切り上げていく。

いつのまにか、グラウンドには有希1人しかいなかった。

ラスト1週を走ろうとしたとき、有希は、背後に人影を感じた。振り向くと加奈子が腕を組んで立っていた。

加奈子「随分、熱心に練習してるじゃない」

加奈子は、同じ年で、短距離部門のエースとして活躍している。

有希「まだいたの？」

加奈子「うん。今日はあんたに話があってね」

有希は、加奈子の方に体を反転させて向き合った。

有希「話って？何かアドバイスをもらえるのかしら？」

加奈子「まあ、あたしは、短距離専門だから、長距離のあんたにできるアドバイスはないわ。でも、プライベートのアドバイスと言えばアドバイスかな。あんたの尻軽さに対するね」

有希「どういうこと？」

加奈子「あたしの峻君に気軽に話しかけないでほしいの」

有希「あたしの……って。あんた、もしかして、峻さんが好きなの？」

加奈子「ま、まあね。実は、付き合ってるのよ」

有希「嘘でしょ。あたしも、付き合ってるのよ」

有希は、目を丸くする。

加奈子「やっぱり、そうなのね。あんたが峻君とデートしてたって噂を聞いたのよ。もうこれ以上、邪魔しないでもらえるかしら」

有希「邪魔してるのは、あんたの方でしょ。峻さんは、あたしを『一番かわいい』って言ってくれてるわ」

加奈子「馬鹿ねえ。遊ばれているのも知らずに、いい気になってるんじゃないわよ」

有希「遊ばれてるのはあんたでしょ」

加奈子「うるさいわね」

有希の勝気な言葉に反応して、加奈子は、右脚で有希の白くて美しい太ももに回し蹴りを入れた。

有希「ひどい。こんなことするなんて」

有希が太ももを押さえながら顔をしかめる。

加奈子「軽く蹴っただけじゃない。悔しかったらやり返してみなさいよ」

有希は、加奈子を睨みつけ、同じように右の回し蹴りを加奈子の筋肉質な太ももに入れた。

今度は、加奈子が顔をしかめる。

加奈子「へえ。ちょっとは根性あるじゃない。ここじゃ、人目に付くから、今から2階の奥にある教室で相手してあげるわ。峻君は、プロレスが好きで、デートでプロレスをよく見に行ったり、プロレスごっこをしたりするから、あたしは強いわよ」

有希「あら、奇遇ね。あたしも、デートはプロレス観戦が多いから、いろんな技を知ってて、かけ合ったりしてる。強いわよ」

加奈子「あたしは、姉ともプロレスごっこをよくしてるから、あんたなんかに負けるはずがないわ。じゃあ、先に行って待ってるわ」

加奈子は、肩を怒らせながら校舎の方へ歩いていった。有希は、しばらくしてから加奈子が指定した教室に向かった。

加奈子がいる教室は、空き部屋になっていて、今は誰も使っておらず、今日は他の教室でも講義はないので誰も寄り付かない。タイマンをするには最適の環境だ。

有希が教室に入ると、準備万端の加奈子が下着姿で仁王立ちしていた。



有希も、手早く陸上のユニフォームをロッカーに放り込むと、加奈子と向かい合う。



加奈子も、有希を正面から睨みつける。



加奈子の挑発を有希は、鼻で笑うと、逆に加奈子を挑発する。



加奈子も、有希の挑発を鼻で笑うと、再び有希を挑発する。



有希は、冷静を装いながら、勝負を仕掛ける。



有希は、両手を前に掲げて、手四つの勝負を要求した。



加奈子は、余裕の表情で力勝負を受けて立つ。



2人は、両手を前に掲げて手四つで組み合う。



加奈子は、余裕の表情を崩さない。



2人は、両腕を震わせながら力を入れていく。



思ったよりも強い有希の力に、加奈子は、歯を食いしばって踏ん張る。



なかなかやるわね。
あたしも、そろそろ本気
出してあげるわ

有希も、加奈子も強烈な押しに耐えながら、歯を食いしばる。



2人は、険しい表情で、相手を全力で押し込んでいく。



そして、ついに額同士をつけて、頭でも押し合う体勢になる。



頭での押し合いも、互角となって膠着する。



しびれを切らした加奈子は、右脚で小外掛けを繰り返す。



思わぬ攻めに、有希の体勢が崩れる。

